

# 現地教育資源を活用した総合的な学習の時間の教育効果

前釜山日本人学校 教諭

神奈川県平塚市立旭陵中学校 教諭 神 吉 貴 博

キーワード：在外教育施設、現地理解、総合的な学習、韓国、日本

## 1. はじめに

在外教育施設において、教育に活用できる資源は多くある。学校環境そのものが教育の素材になることもある。ここ韓国釜山は、日本とのつながりが深い。その関係自体も教育資源となる。教育資源を何にするのか、対象をどこにするのか、どう活用するのかが教師に求められる。資源となる素材の調査をするために、まずは教員が現地理解に努めるのは当然である。その上で、目指す児童生徒像の実現に向けた指導計画を作成する。子どもたちに身につけたい資質や能力、それを引き出すための教育素材、資源を活用する学校行事や授業。それらの関連性を強め連続性のある教育活動にするために研究を行った。私の専科である数学科を初め、現地教育素材を取り入れた教科・領域の在り方について教育効果も含めて調査してきたが、特に重点的に研究を行ったものは総合的な学習の時間の学習効果である。

釜山日本人学校の総合的な学習の時間の位置づけは体験学習との関連性が強い。本校は小学部・中学部ともに毎年、全学年が宿泊体験学習を行う。中学部に関しては、直接体験を目標とする自然体験学習、母国愛を育むことを目的とする日本への修学旅行、自分たちの生活する韓国本土の理解を目指したソウルへの修学旅行の3年間を1クールとして、毎年、中学部の全学年が一斉に行っている。私が赴任した年度は自然体験学習の年であり、済州島へ赴いた。2年目は東京、3年目はソウルであった。この3回にわたる宿泊体験学習を通して、現地資源を十分に活用した総合的な学習の時間を設定することができた。宿泊体験学習を、年間かつ3年間を通した長期プログラムとして位置付けたことにより、事前の調べ学習から事後の研究発表会まで大よそ10ヵ月を3年間かけて体験学習を扱い、自ら学ぶ姿勢や問題解決に向けた探究心、調べたことがらをまとめ考察する力を継続的に養うことができた。本稿においては、釜山日本人学校の総合的な学習の中でも、特に、体験学習に焦点をあてて報告をしたい。

## 2. 総合的な学習の時間について

### (1) 韓国における「総合的な学習の時間」の位置付け

研究に先立ち、赴任国の現地校における「総合的な学習の時間」の実態について調査した。日本における「総合的な学習の時間」は、ここ韓国では「創意的裁量時間」に相当する。創意的体験活動は、2007年に改訂された教育課程まで存在していた「裁量活動」と「特別活動」を統合・再編し、2009年に改訂された教育課程において新設されたものである。その趣旨は、多様な体験的学習活動をひとまとめにすることで、各学校の裁量でこれらを柔軟に運営できるようにする点にあった。なお創意的体験活動に統合された裁量活動には、教科に関する深化・補充学習を行う「教科裁量活動」と、学校ごとの特性や児童生徒のニーズに応じて教科横断的な学習と自己主導的学習を行う「創意的裁量活動」の2種類が存在しており、後者はその目標が日本の総合的な学習の時間とよく似ているように感じる。創意的体験活動はかつての裁量活動と特別活動を単純に足し合わせたものではないが、創意的体験活動の中にわが国の総合的な学習の時間や特別活動に相当する内容が含まれているように感じられる。釜山市の開雲（ケウン）中学校、한바다（ハンバダ）中学校に向けた調査によると、国家カリキュラムに基づき自校でオリジナルの授業を展開している。背景には大韓民国教育部（日本の文部科学省）が公表した大学入試制度と関連があるように思える。筆記試験による入試選抜から、生活記録簿に基づいた創意性、生徒の社会活動や品性、奉仕活動や特別活動を重視した選抜へと変わった。これにともない、教育部では、従来の注入式・暗記

式の教育から創意性教育体制への遂行評価を実施し、児童生徒に対する多様性と公正性を踏まえ、総括に評価する方向を打ち出している。児童生徒の自己主導的な学習能力を習得させるために設けられた位置づけとなっている。

## (2) 日本における「総合的な学習の時間」

平成29年3月告示の新学習指導要領に向けた中央教育審議会による答申（学習指導要領等の改善及び必要な方策等）では、総合的な学習の時間における目指す資質や能力、教育目標が以下のように整理されている。

### 【目指す資質・能力】

- 課題について横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して獲得する知識（及び概念）
- 探究的な学習のよさの理解
- 探究的な学習を通して身に付ける課題を見いだし解決する力
- 主体的な探究活動の経験を自己の成長と結び付け、次の課題へ積極的に取り組もうとする態度
- 協同的（協働的）な探究活動の経験を社会の形成者としての自覚へとつなげ、積極的に社会参画しようとする態度

### 【学習指導要領で示す目標】

探究的な見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えることを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- 課題（学習対象）に関する概念的知識を獲得し、課題の解決に必要な知識や技能を身に付け、探究的な学習のよさを理解するようにする
- 実社会や実生活の中から問いを見出し、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現する力を育成する
- 主体的・協同的（協働的）・探究的な学習に取り組み、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画する態度を育てる

## (3) 本校における「総合的な学習の時間」の位置付け

(1)、(2)を踏まえ、釜山日本人学校では総合的な学習の時間の目標と全体構想（中学部）を以下のようにしている。

### ① 「総合的な学習の時間」のねらい

- ・自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる。
- ・学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

### ② 総合的な学習の時間の時間割り振り

総合的な学習の時間として位置づけられた年間70時間を、次のように時間配分し、2領域に分けて実施する。

### 【広安タイム（学習活動）】

- ・学校が位置する広安里の地名を取り、広安タイムという名称で総合的な学習の時間として設定。
- ・宿泊体験学習などの体験学習や上級学校調べなどを通し、事前学習では自ら設定したテーマのもと調べ学習を行う。事後学習では、全校児童生徒向けの発表会、保護者・教職員向けの報告会に向けてまとめ学習を行う。

### 【韓国語の時間】

韓国人講師と共に学習し、韓国語の基本的な能力（話す、聞く）を伸ばす授業を行う。また授業の中で単に言

業だけでなく、生活習慣や文化の違い、歴史なども勉強していくことで、韓国への理解と関心を深め、また、自国である日本のよさ、すばらしさを同時に感じさせる。

### ③ 総合的な学習の時間とその役割

「国際理解」「コミュニケーション能力」の2点を土台として成り立っているものとしてとらえ、学年の発達段階や子どもの興味関心を考慮に入れながら、学習を進めていく。現地の韓国人講師による韓国語の授業で、韓国語の「話す・聞く・書く能力」の定着をめざす。習得した言語を韓国の方々と触れ合う様々な行事の中で活用することで、コミュニケーション能力の向上も図る。また、生活科・社会科の中で韓国の生活習慣や文化の違い、歴史などを学ぶとともに、宿泊体験学習や慶州ナザレ園訪問などの校外での体験学習を通して、日本と韓国のつながりについてより一層の理解を深める。さらに、学校外での見学や実習、現地の方のゲストティーチャーによる授業、体験学習を取り入れるなど、指導方法の工夫を行う。

## 3. 調査報告

1、2をふまえ、私は3年間を通し現地教育資源を活用した総合的な学習の時間の教育効果について以下のよう調査した。

### (1) 全体構想

私が赴任した初年度は自然豊かな済州島を宿泊体験学習先とし、それに関わる活動を総合的な学習の時間で行った。以下に年間（4月から12月）を通して実践した毎年の流れを済州島への宿泊体験学習を例にまとめた。

#### ① 事前学習（4～7月、9月）

現地について理解するために、「自然」「歴史」「文化」「生活」の4分野に焦点を絞り、班に分かれて調べ学習を始めた。班の仲間と協力して、インターネットや書籍、韓国スタッフへの聞き込み等を通して学習を進めた。済州島について調べていく中で、韓国本土や日本との関係性についての理解が必要であることに気付いたり、済州島が独自の成長を遂げたその経緯に関心を抱いたり、韓国と日本の歴史的背景や伝統文化の共通点・相違点について関心を持ったりする生徒がいた。調べた内容は発表を通して共通理解を図った。

#### ② 宿泊体験学習（10月）

済州島での世界遺産（漢拏山）への登山、世界遺産（万丈窟・城山日出峰）の見学、自然史博物館・民俗村の訪問、伝統陶芸体験などの直接体験を通して、事前に自ら学んだこと・調べたことについて理解を深めた。さらに学習を進めようと新たな課題設定を設ける生徒や調査をさらに掘り下げようとする生徒がいた。

#### ③ 事後学習（10～12月）

小学部に向けた学習発表（11月）と保護者の方々に向けた個人研究発表（12月）に向け、まとめ作業に取り組んだ。小学部対象の発表は自分が済州島のガイドになったつもりで、済州島により興味を持ってもらうように、パソコンを駆使してまとめ学習を行った。保護者対象の発表に向けては、実際に済州島での体験・見学を通して各自が興味関心を持ったことについて自発的に課題設定を行い、予測・考察をふまえ、問題解決に向け2ヵ月かけて研究を進めた。調査結果を、筋道を立てて順序良く、発表・報告を行った。

### (2) 調査と成果

#### ① 現地教育資源を活用した自然体験学習

3年間を通して、子どもたちが主体的に課題解決するための教育資源の調査を行った。赴任初年度は自然体

験学習ということもあり、韓国有数の世界遺産が詰まった済州島を教育素材に選択した。同じ中学部の教員による下見を踏まえ、私自身も長期休暇を利用して現地への視察を行った。

自然豊かな済州島には3つの世界遺産や火山をもとにした地形、数多くの資料館や博物館がある。また、歴史上、日本とのつながりも深く、済州島の歴史背景を調べると母国日本への理解にもつながるため、学ぶ環境は十分整っている。多面的に捉えられる教育資源のため、総合的な学習と教科との関連性も充実している。以上の調査を踏まえ、子どもたちに教育資源、済州島を提示した。(1)で上述の通り、班でテーマを設定し、グループ研究を進めていくようにした。歴史をテーマに設定した班により、韓国本土と異なり独特な発展を遂げた済州の姿が明らかになっていく。このことにより、独自の文化・生活を持つ済州島に焦点を当てて調査にあたる班もあった。地形や地理に注目して、世界自然遺産と関連について調べた班もあった。それぞれ別々の課題ではあるが、調べていくうえで時に相互に関係性のある内容があったり、ある班の発見により別の班の調査報告が裏返されたりすることもあった。それらの事前学習を通して、自分たちで課題を追求していくことへの興味関心を持たせることができたのは成果であった。



中学部による個人研究発表会

## ② 現地教育資源を活用した国際理解

派遣2年目の東京への宿泊体験学習に向けては、次年度のソウルへの宿泊学習を見通して教育資源の選択をした。日本とソウルの首都を比較する際に、テーマ設定は無数にある。その際、政治・経済、歴史、文化など多岐にわたる教育資源に関し、正確な情報を的確に生徒に提供することに留意した。そのために、自らの足で現地に赴く必要がある際は、休暇を利用して調査を行った。

釜山日本人学校の宿泊体験学習は大前提として旅行会社との契約・提携は一切ない。そのため、すべての計画等を教師が作成するオリジナルのものとなる。そのため、毎年の行き先や学習内容、どのような力を子どもたちにつけていくのかを、全教職員で協力して計画し実施してきている。中学部の主任として2年目、3年目を迎えた私は、その点を好機として捉え、綿密な現地調査による豊富な教育資源の発掘に力を入れた。

日本と韓国の比較の際、東京においては次の項目を教育資源とした。文部科学大臣との面会、参議院議員会館や自民党本部総裁室、皇居、浅草における班別自主行動。宿泊体験学習を通して他の体験場所も複数あるが、教育資源として総合的な学習に活用するものとしては以上の項目を設定した。母国日本を海外から見ること、改めて日本の政治や歴史・文化を深く追求する機会となった。前年度の経験が活かされ、課題設定と問題解決に向けた追求・研究が円滑に進んだ。

調査によると、1年目に「自ら課題を見つけ、自ら学び主体的に問題解決する力」「問題解決や探究活動に主体的に取り組む姿勢」が養われた生徒が多くいた。そのため、その効果を活かし、2、3年目は「日韓の国際理解」を通して母国日本と自分たちの暮らす韓国の正しい理解、国際的な視野をもつことを目標とした。

ソウルにおいては、大統領官邸「青瓦台」、朝鮮王朝の宮殿「昌徳宮」、朝鮮半島軍事境界線を調査項目とした。日韓の国際理解には、朝鮮半島に対する正しい理解が必要とされる。そのため、在釜山日本国総領事館との連携により朝鮮半島事情の調査を行った。ソウル大使館への連絡も含め、安全面を確保した教育資源の提供が求められた。領事館職員による講話集会も事前に行った。

また、調査の中で朝鮮半島軍事境界線を教育資源と考え、現地への視察を行った。この調査は私自身が朝鮮半島の理解と国際平和について考える大変有意義なものとなった。国境線ではなく軍事境界線は世界でも類はない。軍事境界線とは、陸上において、韓国と北朝鮮との実効支配地域を分割する地帯のことである。両国が主張する領土が、朝鮮半島全域・島々とすべて一致していることから国境線ではなく境界線と言われている。本線は朝鮮戦争の休戦ラインであり、1953年7月27日の朝鮮戦争休戦協定により発行された。軍事境界線上を挟んだ非武装地帯を例外的に南北が共同で警備する共同警備区域が存在する。この場所へは韓国籍の人は軍人以

外は来られず、ある所定の外国籍を持つ人が決められた条件を満たしたうえでツアーガイドの方の指示に従って立ち入ることが可能とされている。ツアー内には、南北を分断する「イムジン川」、1953年の休戦協定締結後に捕虜が自由の身として渡った「自由の橋」、韓国最北端の駅「都羅山駅」、北朝鮮の庶民の暮らしを見渡せる展望台などが行程に組み込まれている。現在の韓国と北朝鮮の関係、朝鮮半島の歴史に触れるためには調査すべき場所であった。ソウルへの宿泊体験学習実施年度（2017年）の4月に北朝鮮による弾道ミサイル発射など朝鮮半島情勢の悪化を受けて6月の実施は保護者との話し合いで見送りになった。国際理解に向けた教育資源として、私が調査した内容を子どもたちに伝えることで素材を活かすこととなった。先日の領事館職員による講話と私のプレゼンテーションを踏まえ、子どもたちが本年度もテーマ・課題を設定し、宿泊体験学習を通して主体的に研究を進めることができた。

### ③ まとめと課題

保護者・子どもたちへのアンケートの結果によると、宿泊体験学習への期待が最も多いことが分かる。冒頭に述べたが、開放的な環境にしながら閉鎖的な教育環境である現状を踏まえると、保護者にとっては子どもたちに体験学習を通して学ぶ喜びを体験で感じられる貴重な経験を多くしてほしい願いがあがる。子どもたちにとっても最も心に残る行事である。

3年間の調査により、体験学習の事前の段階で、活動に好奇心を持って取り組む生徒が多く見られるようになり自主的にテーマ設定、課題追及ができるようになった。その上で、体験当日と事後学習を通して、実体験に基づいた調査内容の報告や考察、新たな課題設定を行うことができるようになった。また、総合的な学習の時間に限らず、学習に向かう姿勢が主体的になったことも成果として挙げられる。授業で習ったことや教科書に書かれていることに留まらず、自分の関心の持ったことに追求する姿勢も持てるようになった。

一方で課題は、教員の人数不足による多大な労力である。日本人学校は財政基盤が強いわけではないので、旅行会社との提携は一切ない。日本の多くの場合、旅行会社と契約して3年間の積み立てを経て、最終学年で修学旅行へ行くことがほとんどである。人的配置も限られているため、学校外の学習体験活動を行う際には時間と労力が教員にかかる。3年間にわたり、安全面を第一に、細部にまで配慮した綿密な計画を立ててきたが、この現状は厳しいと言わざるを得ない。運営費の値上げや現地採用職員の採用、非常勤講師の派遣などを通して解消してほしい課題である。

## 4. おわりに

派遣の3年間の間、MERS（中東呼吸器症候群）の拡大、慰安婦像問題、大統領弾劾、朝鮮半島事情の悪化など韓国国内外問わず、様々な問題があった。今もなお日韓関係で状況の緊張が続く件もある。その中で教育活動にあたった3年間。児童生徒も同じ環境下で過ごしてきた。この状況だからこそ、世界に目を向けて国際感覚を養う機会として現実を受け止めてほしいという願いから、今回の調査に踏み込んだ。

総合学習の時間の教育効果について、教育資源の調査を進めていくことで、私自身も現地韓国への理解を深めることができた。子どもたちとの学習の中で、日本では経験できない経験を数多くすることができた。そこで得た知識やそこで感じた感性を児童生徒と共感することで、学ぶ喜びを高め、次の活動への礎とすることができた。総合的な学習の時間で培われる国際理解・課題設定・探究活動の積極的な態度は、これから国際社会を生きていく上で、必要不可欠なことであり、これらの経験は生徒の生きる力になるはずである。各国の日本人学校は現地の環境を活かし、充実した総合的な学習の時間の在り方や教育効果を追求し、帰国してからは経験できない体験や学びを多くさせることが今後も求められるだろう。

今回、以上の調査を行うにあたり、このような大変貴重な機会を下さった文部科学省をはじめとする神奈川県教育委員会、平塚市教育委員会、釜山日本人学校他、多くの関係諸機関にこの場を借りて深く御礼申し上げたい。